

社員座談会

この道の「安全」の上に、 「安心」「快適」という感動を

高速道路の安全・安心・快適を支える仕事は、様々な現場の判断と協働によって成り立っています。本座談会では、異なる領域で働く社員が、自らの業務を通じて感じる使命感と、これからの価値創造への思いを語りました。



公文 弘之

名古屋支社
四日市工事事務所
工務課

小川 亜果梨

本社
事業開発・推進本部
事業創造部
新事業開発課

中村 海地

本社
総務本部
人事部 人事課

奥村 祐子

名古屋支社
羽島保全・
サービスセンター
更新工事担当課

深澤 元

本社
技術本部
高度技術推進部
技術開発課

高速道路に惹かれた、それぞれの原点

司会 NEXCO中日本に入社した経緯と現在ご担当されている業務を教えてください。

公文 大学時代から土木構造物に関心があり、多くの人が利用する高速道路の設計から維持管理まで関わることができる点に魅力を感じ、NEXCO中日本を選びました。現在は四日市工事事務所の工務課に在籍しており、事業全体の調整や予算管理、工程調整、施設移管などに携わっています。

奥村 私も土木系の仕事に携わっています。現在は羽島保全・サービスセンターの更新工事担当として、リニューアル工事や耐震補強工事の設計業務を担当しています。入社したのはコロナ禍の時期で、人の移動が制限される一方、高速道路は人だけでなく物も運ぶ交通インフラであることを強く実感しました。特にNEXCO中日本は、大都市間を結ぶ大動脈の役割を果たす路線を管轄しており、社会や経済活動を支える重要な基盤であると感じています。そのような社会に欠かせない交通インフラを守る仕事に携わりたいと考えたことが入社理由です。

小川 私は少し違う入り口で、高速道路そのものに加えて、SA・PAへの関心が原点にありました。学生時代、出身の大阪から東京へ向かう際によく高速バスを利用しており、高速道路は目的地へ向かう「非日常への入り口」のような存在でした。特にSA・PAが好きで、そうした場所に関わる仕事がしたいと思ったことが、NEXCO中日本を志望したきっかけです。現在は新事業開発課に在籍し、新事業の検討や高速道路沿線の地域開発などを担当しています。入社時に感じていた高速道路やSA・PAへの関心は、現在の担当業務にもつながっています。高速道路そのものに加えて、地域の価値をどのように広げていくかを考えることが、今の仕事の大きなテーマです。

中村 私の場合は、就職活動を始めた当初は高速道路業界を強く意識していたわけではありませんでした。会社説明会を通じて、高速道路が物流や人流に与える影響力の大きさ、社会貢献度の高さを知り、関心を持つようになりました。中でも当社は、首都圏・中京圏・近畿圏を結ぶ交通の要所を担っています。そうしたフィールドで社会に貢献したいと考え、入社を決めました。現在は人事課に在籍していて、ダイバーシティの推進や社内規程の整備・改正など会社の基盤を支える重要な役割を担っているという意識を持ちながら、日々の業務に取り組んでいます。



深澤 皆さんそれぞれ入り口は違いますが、私も自分の関心と高速道路がつながったことが入社理由でした。もともと自動車が好きで、大学では機械工学を学んでいました。就職活動では製造業も視野に入れていましたが、自動車に関わるインフラを考えた時に、高速道路という選択肢が浮かびました。また、私の出身地が当社の事業エリアである山梨県であったことも理由の一つです。現在は技術開発課に在籍して研究開発を担当し、特に自動運転の実現に向けて注力しています。

見えない備えと協働が、安全を支える

司会 みなさん、とてもポジティブな動機でNEXCO中日本に入社されたようですね。では、これまでの業務の中で、実際に誇りや使命感を感じたご経験を教えてください。

公文 仕事の重みを強く感じたのは、2020年度に北陸地方で発生した豪雪対応です。当時は入社2年目で金沢支社に勤務しており、現場経験もまだ限られていました。そのような中、北陸地方は豪雪に見舞われ、結果として高速道路を長時間通行止めする事態へと発展し、本線上に多くの滞留車両が発生しました。私は現場を支援する係の一員として、滞留されているお客さまへ支援物資を配布するなど対応しましたが、労いの言葉をいただくこともあれば、通行止め解除の見通しに対する厳しい声もいただきました。だからこそ、高速道路を止めてはいけない、常に使える状態に維持することの重みを感じました。

奥村 私も、大雪により滞留した車両への対応は強く印象に残っています。入社1年目の時、新名神高速道路で雪による通行止めが発生し、大規模な車両の滞留が発生しました。私は支援の係として、支援物資や食料、ガソリンの購入、お客さまからの電話対応などに携わりました。特に印象に残っているのは、車内に赤ちゃんがいるお客さまから、温かいお湯や

粉ミルクが欲しいという連絡を受け、おむつも含めて用意したことです。高速道路での滞留は人命に関わることであり、全社で備えることの重要性を感じました。

公文 豪雪対応では、本社、支社、事務所、グループ会社など、それぞれの立場の人がそれぞれの役割を担っていました。情報が十分ではない中でも、一人ひとりが早期の通行止め解除に向けて、自分に何ができるかを考えて動いていました。立場は違っても、同じ方向を向いて行動していたことに、組織としての使命感を感じました。

小川 道路そのものを守る業務とは少し異なりますが、私も、多くの関係者と協力しながら一つの取組みを進める重みを感じたことがあります。以前の職場で地域の学校や企業との連携に取り組んでいた時、アウトレットモールを会場としたイベントを開催しました。開催にあたっては、会場管理者、出店者、自治体、消防署、警察など、多くの関係者との調整や申請手続きが必要でした。

手続きは大変でしたが、イベントが無事に開催できた時、来場されたお客さまの笑顔や、出店者の方からの「良いイベントだったね」という声に触れることができました。イベントは当日のにぎわいが目立ちますが、その裏側には見えない準備や調整があります。そうした準備が価値を支えているのだと実感しました。



中村 見えないところでの確認や判断が仕事を支えているという意味では、道路管理業務も同じだと思います。私が富山保全・サービスセンターで道路占用の業務に携わっていた際に、一般道の事例ですが、道路占用の許可基準を満たしていない電線に車両のアームが引っかかり、街路灯が倒れて歩行者が亡くなる事故があったと知りました。高速道路においても書類上での自分の確認ミスや判断ミスが第三者被害につながる可能性があることに気付き、責任の重大さを強く感じました。

小川 SAの運営管理に携わっていた時も、仕事の重みを感じました。コロナ禍で観光のお客さまは大きく減っていた一方、物流など暮らしを支える仕事に関わる方々は絶えずSA・PAを利用されていました。SA・PAは、人々の生活に欠かせない重要な拠点です。道路を利用する方だけでなく、社会を動

かす様々な方にもつながる仕事なのだと実感しました。

深澤 私は、先進技術の実証という場面で、仕事の重みを感じました。新東名の建設中区間で実施した自動運転の路車協調実証実験では、高速道路会社としてフィールドを提供し、電源や通信網を整備したうえで、様々な実証を受け入れました。本社、支社、事務所、企業など、多くの関係者との協議・調整を重ね、全員が一体となって進めなければならない仕事でした。自動運転は先進的な取組みであり、社会からの期待も大きい領域であるからこそ、非常に重みを感じました。

社会からの声に、仕事の意義を見つめる

司会 これまでの業務において、社会的使命や責任を感じた経験をお話いただきましたが、実際にお客さまや地域の方々と接することで、ご自身の仕事の価値を再認識された経験はありますか？

公文 現在、四日市工事事務所で新規路線の建設や拡幅事業に携わっています。2025年3月に一部区間が開通した際、地域のイベントやお祭りで「開通してくれてよかった」、「ありがとう」という言葉をいただき、仕事のやりがいを感じました。高速道路の整備が、地域の方々の期待につながっていることを実感しました。

小川 地域の方々の期待を感じるという点では、私も東京工事事務所で東京外かく環状道路の用地取得業務に携わっていた時に、早期の道路完成を望む声を直接聞く機会がありました。その声を通じて、高速道路は社会から求められているのだと強く感じました。

公文 一方で、すべての方が同じように受け止めているわけではありません。特に高速道路沿線の方は、騒音や日照など、生活に関わる不満を持たれている方もいます。そうした方々とも信頼関係を築き、解決に向けて動いていくことが大切だと感じています。

奥村 私は、通行止め時などに、お客さまの反応を確認している部署から社内にも共有されるSNSに寄せられるコメントを読むことがあります。お客さまの声に触れる機会は限られますが、そうしたコメントを通じて、世間の皆さまにどのように受け止められているのかを感じることができます。

中村 私も、災害時の通行止めや、雪による予防的通行止めなどに関して、担当部署から共有されたSNS上のコメントを読む機会があり、高速道路が社会にとっていかに必要な存在であるかを再認識させられました。早期の通行止め解除に対する感謝の声もある一方で、通行止め解除までに時間を

要していることや、高速道路が利用できないことへの憤りなど、厳しい声も多くいただきました。仕事やプライベートにかかわらず、高速道路を必要としている方が多くいるからこそ、使えなくなること必要なものが届かなかったり、行きたい場所に行けなくなったりします。たとえ短時間であっても、高速道路が使えなくなることの社会的影響は大きく、私たちが支えているものの大きさを改めて実感しました。

奥村 私はどちらかというと、ポジティブな声をよく見えます。「ご苦勞さまでした」、「頑張ってください」といったお言葉をいただくと、自分が携わっている仕事为社会や経済を支える重要なインフラに関わっていることを実感します。



深澤 身近な人の言葉から、高速道路の価値を感じたこともあります。地元の甲府で自営業をしている父が、中部横断自動車道の開通後に「とても便利になった」と話してくれました。身近な人の仕事や暮らしにも高速道路が役立っていることを実感しました。

小川 私は現在、新事業開発に携わっており、社外の方と話す中で、「よく高速道路を使っています」というような言葉をいただくことがあります。自分の仕事も、様々な形でお客さまや地域につながっているのだと感じます。

深澤 技術開発の分野でも、社会からの期待を具体的に感じる場面があります。ハイウェイテクノフェアで自動運転関係の説明係を担当した際には、来場者から「もうここまで来ているのか」、「もっと進めてほしい」というお言葉をいただき、自動運転が社会課題の解決にもつながる可能性を改めて感じました。

公文 施設移管の業務でも社会や地域の課題に向き合う機会が多く、その中で、当初は不安や不満を抱かれていた地域の方と、対話を重ねる中で少しずつ信頼関係が生まれていくことがあります。現地に足を運んだ際に、「君も大変だね、頑張れよ」と声をかけてもらったりすることもあり、そうした関係性が仕事のやりがいにつながっています。

小川 地域の方々やお客さまの声は、道路をつくる仕事だけ

でなく、SA・PA、新事業開発、地域連携など、様々な仕事の中で触れることができます。高速道路の価値は道路そのものにとどまらず、人々の移動、暮らし、地域の活性化といった、社会全体の新しい価値にもつながっていると感じています。

安全・安心・快適を、自らの仕事として受け止める

司会 NEXCO中日本には「高速道路を通じて安全で安心・快適な社会を支える」というパーパスがあり、すべての事業活動の根底にある精神だと思います。これが、ご自身の業務や取組み姿勢にどうつながっているかお聞かせください。

深澤 パーパスが自分につながっていると実感するのは、自分自身が高速道路を利用する時です。家族のいる神奈川から妻の実家がある金沢へ帰省する際、高速道路と一般道を組み合わせて移動することがあります。その際、途中の一般道では特に運転に注意する必要のある峠道の区間があるのですが、再び高速道路に乗った時に、安全で安心、そして快適さを強く感じます。

奥村 私も、利用者としての感覚は大切だと感じています。日々の業務では、6つの基本姿勢にある「お客さま起点で考える」「現場に立って考え行動する」ということを意識しています。自分で高速道路を利用すると、舗装の荒い部分や渋滞に対して、利用者としてストレスを感じることがあります。そうした実感が、快適さを考えるうえで大切なのだと思います。

公文 私も、実際に道路を利用する時の感覚を大事にしています。リニューアル工事後の道路や、新しく開通した路線を利用した時に、違和感がない状態こそが、当たり前の安心や快適につながるのだと感じます。だからこそ、少しでも違和感を覚えた時には、それを見過ごさず、改善につなげることを大切にしています。



奥村 快適さという点では、渋滞対策も大きいと思います。羽島保全・サービスセンターで管理している一宮インターから一宮ジャンクション間では、車線幅や路肩幅を調整し、片側2車線から3車線に変更した区間があります。これによって渋滞が大きく緩和されており、快適さにつながっているのだと思います。

深澤 快適さを支える前提には、安全・安心があります。その安全・安心の重みを考えるうえで、私にとって大きな経験となっているのが笹子トンネル天井板崩落事故です。当時は金沢支社に在籍していましたが、後半の復旧フェーズで大月保全・サービスセンターに応援係として参集し、上り線側トンネルの復旧を担当していました。事故の現場を実際に目の当たりにし、強い衝撃を受けました。その経験から、このような悲惨なことは絶対に起こしてはならないという思いを、これまでの仕事の中で常に持ち続けてきました。安全・安心を支える仕事に携わる者として、事故の記憶と教訓は、自分の中で非常に大きな経験になっています。

奥村 私は、笹子トンネル天井板崩落事故が起きた時は中学生で、ニュースを通じて知りました。入社後、安全啓発館で事故の概要を学び、会社が起こしてしまったことの重大さを実感しました。毎年12月2日の追悼慰霊式でご遺族の皆さまのお言葉を伺うたびに、気が引き締まる思いになります。

公文 私も、笹子トンネル天井板崩落事故については、入社前はニュースで知る程度でした。入社後、原因や背景を学ぶ中で、安全行動指針にある「潜在的リスクにも目を向ける」という考え方の重要性を強く意識するようになりました。先ほどお話しした「違和感」も、潜在的リスクにつながらと思っています。

変化を捉え、次の価値創造に挑む

司会 2026年度から新経営計画チャレンジV(2026-2030)Aがスタートしました。これからの5年間、ご自身が、文字通り、どうチャレンジしていくのかお聞かせください。

小川 新経営計画を自分の仕事に照らし合わせると、新事業開発課に所属する立場として、新しい事業の種を探し、それを事業化して形にしたいという思いがあります。将来的には、新事業が当社の新たな経営の柱の一つになり、お客さまに新たな価値として届くことをめざしています。

公文 新たな価値を拡げていくという意味では、当社が有する技術力やノウハウを、もっと外に広げていくことも大切ではないかと感じています。用地取得業務や維持管理業務で得た知見は、外部にも提供する価値のあるものだと思う

います。そうした技術や知見を、地域への協力や社会への貢献につなげていくことも、これからのチャレンジの一つになるのではないのでしょうか。

深澤 これまで蓄積してきたものをどう広げていくかは重要だと思っています。私自身は技術開発に携わる立場として、6つの基本姿勢の中では「変革を続ける」ことを特に大切にしています。自動運転やAIなど、技術進化のスピードは非常に速くなっています。当社が価値を提供していくためには、車両側の技術やトレンドを理解し、私たち自身もアップデートし続ける必要があります。

奥村 私も、新しい経営計画の内容を踏まえ、時代のニーズに合わせて自分自身もアップデートしていかなければならないと感じました。自動運転のような先進技術とは別の視点になりますが、点検の担い手不足が進む中で、維持管理を支える技術やノウハウの重要性はさらに高まっていくと思います。安全で安心なインフラを維持していくためには、これまでのやり方を大切にしながらも、時代に合った方法へと変革を続けていくことが必要です。

中村 新しいことに挑戦していくためには、技術や事業そのものに加えて、それを支える職場の雰囲気も大切だと感じます。私が日々の業務で大切にしているのは、話しかけやすい雰囲気づくりです。今後キャリアを重ね、部下を持つ立場になれば、周囲への影響も大きくなります。だからこそ、相談しやすく、声をかけやすい存在でありたいと考えています。

小川 新事業開発であっても、これまでの道路事業であっても、基本にあるのは「お客さま起点で考える」ことだと思います。新しい事業を考える時も、単に新しいことを始めるのではなく、お客さまにどのような価値を届けられるのかを考えることが大切です。お客さまに新たな価値を届けるという視点を持ちながら、事業開発に取り組んでいきたいと考えています。

地域と人をつなぎ、未来の可能性を広げる

司会 いよいよ最後のテーマになります。今現在、NEXCO中日本で働くことにどういう楽しさを感じているか、そして、これから5年間と言わず、未来に向かって「NEXCO中日本」という道に、どういう景色を描いていきたいかお聞かせください。

小川 現在の仕事では、異なる業界の立場の方々に関わりながら、新しい事業の可能性を考えることに楽しさを感じています。すぐに成果が見える仕事ではありませんが、高速道路や地域の価値をどのように広げていけるのかを考えることに、

大きな意義を感じています。NEXCO中日本だからこそ生み出せる新しい価値を、地域や社会に届けていきたいです。

中村 私も、様々な経験を通じて新しい知識を身につけられることに、仕事の楽しさを感じています。入社以来、道路管理に係る業務やラジオでのイベント広報、大学での講義など、幅広い業務に携わってきました。部署や役割が変わるたびに、自分の知らなかった世界に触れることができ、今後も新しい物の見方や考え方を積極的に吸収しながら成長していきたいです。

奥村 私も、新しいことに挑戦できる環境にいることが、一番楽しいと感じています。自分が挑戦したいことに対し、上司や仲間が背中を押してくれる環境があります。そうした環境があるからこそ前向きに取り組むことができ、新しいことにも挑戦していけるのだと思います。

公文 私にとっては、組織全体の風通しが少しでもよくなるように取り組むことも、仕事の楽しさの一つです。業務全般を通じて、多くの人と話し合いながら解決していくプロセスに仕事の面白さを感じています。工務課は、周囲を取りまとめ、様々な部署から頼られる立場でもあります。だからこそ、他部署とも積極的にコミュニケーションを図り、相談しやすい存在になれるよう意識しています。

深澤 私がこれから先に作っていきたい景色としては、高速道路を利用されるお客さまが、家で休んでいる時と同じくらいストレスフリーに移動できる状態を思い描いています。ワクワク感やエンターテインメント性を高める考え方もあるかもしれませんが、私自身は、高速道路であることを特別に意識させない自然な安心感こそが、究極の安全・安心・快適につながるのではないかと考えています。



中村 そのような未来を実現するためにも、当社が社会から何を求められているのかを察知し、期待に応えていくことが必要だと思います。人口減少や社会ニーズの変化を踏まえると、これまでと同じ前提だけでは考えられないことも増えていくはずで。だからこそ、社外の視点も持ちながら考え続けることが重要だと感じています。

奥村 私も、社会の変化に合わせて考え続けることは大切だと思います。高速道路は、5年後、10年後、その先も、社会にとって「あって当たり前」の存在であり続けたいと思います。ただ、その当たり前を支えるためには、私たち自身も変わり続けなければなりません。自分自身もアップデートしながら、これからも安全で安心なインフラを支える仕事に携わっていききたいです。

公文 高速道路を支える仕事は、これからの社会や地域にどう価値を届けるかを考える仕事でもあると感じます。私は現在、建設事業に携わっていますので、一日でも早く道路を開通させ、地域と地域を結び、地域の活性化に貢献していきたいと考えています。新たな取組みとも組み合わせながら、高速道路を整備し、守り、活かすことで、人々や地域の可能性を広げていきたいと思っています。

